

水月湖の魚と地引網

五十嵐 清

水月湖と魚

若狭湾国定公園の一つである三方湖群はレインボーラインの完成とともに一躍観光資源として脚光を浴びてきた。三方湖群は三方、水月、菅、久々子、日向の五湖からなり、三方五湖の名で親しまれている。風光の明媚なこ

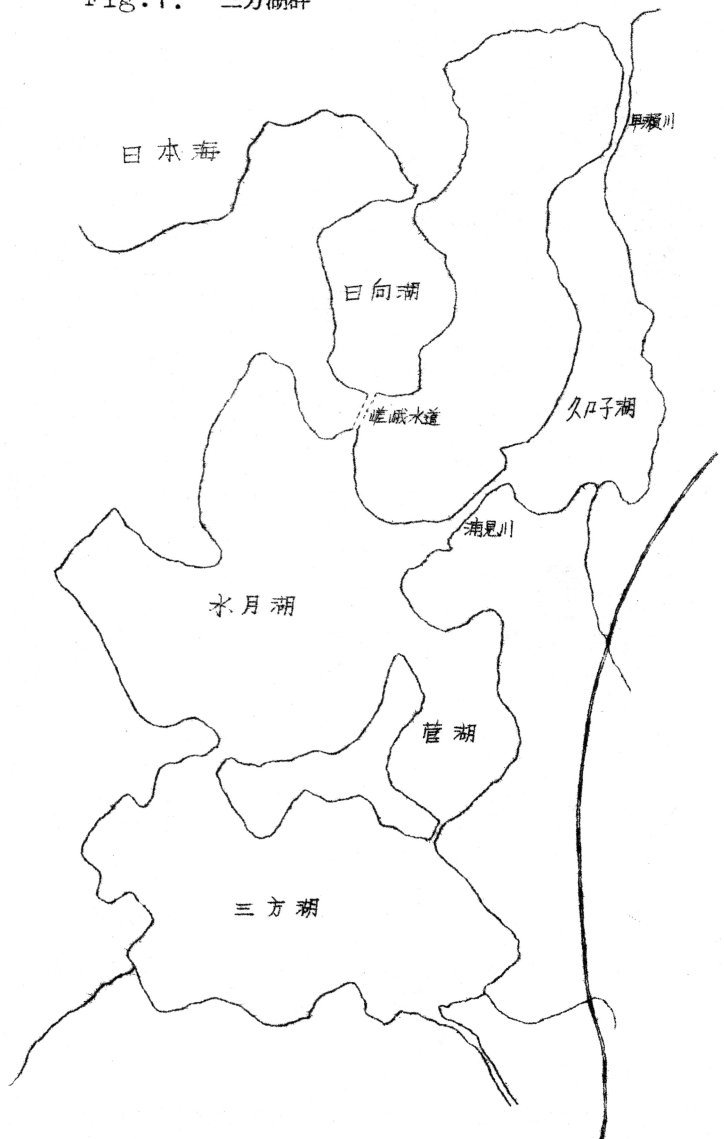
とはよく知られているが、湖の強い個性と、そこに生息する魚種の多いことと共に水産資源としての魚も価値の高いことで注目されている。三方湖は淡水湖として、日向、久々子の両湖は海水又は半かん水湖として知られているが、水月湖は三方と日向、久々子湖の中間にあって、複雑な要素をもつ特異な湖として、多くの研究者の注目の的になっている。

水月湖は面積5平方科で、三方湖群の総面積の10.03平方科の約2分の1に相当し、五湖のうち最も大きい。三方湖では水深1m～2mであるのに比べて

水月湖は実に33mの水深をもち、陥没によって生じた湖といわれている。

水月湖は、瀬戸で三方湖と続き、浦見川で久々子湖と、嵯峨水道で日向湖と通じている。水

Fig.1. 三方湖群



月湖は元来淡水湖であったといわれ、寛文4年浦見川が掘られて久々子湖と連がり、寛政12年嵯峨水道が造られて日向湖と結ばれるようになった。そのために日向、久々子の両湖から海水の

逆流に見舞われる結果となった。

水月湖に侵入した比重の高い海水は湖底に停滞してその上を淡水が覆う形となった。湖の上層部に繁殖したプランクトンなどの微生物の遺骸がやがて沈降堆積して、バクテリアなどの分解をつづけそのため硫化水素の著しい発生を起し、下層部に全く生物の生息できない死の層

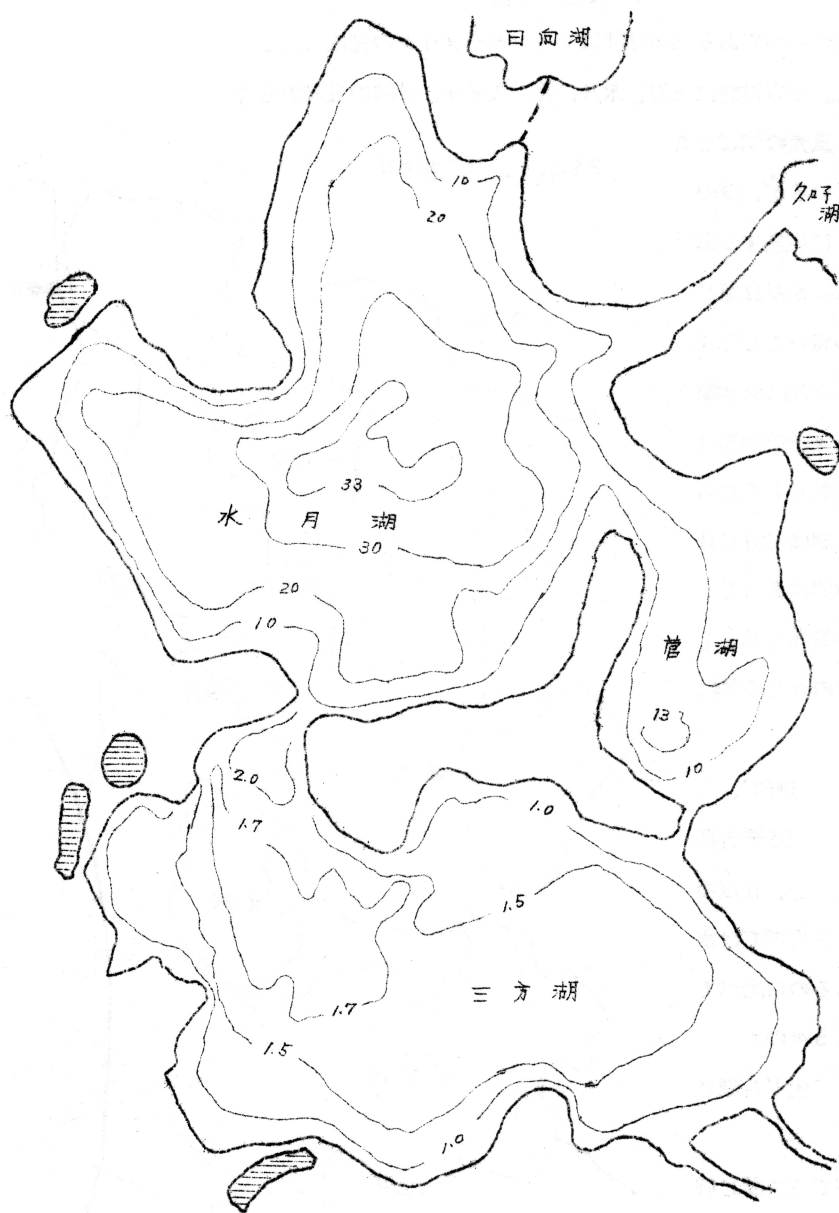


Fig. 2. 三方・水月・日向湖の水深(1966)

(無生物層)を、上層部に魚や微生物の生息する生物層を作りあげてしまったといわれている。

(宮地 1963)。生物

層は水面から10m

までで、その深さに

生活が限定されてし

まう。このような特

異な湖だけに、そこ

に生息する魚種も淡

水産から海産まであ

って、魚相も大変複

雑である。

主な魚種はコイ、

キンブナ、ゲンゴロ

ウブナ、ハス、オイ

カワ、ウグイ、アマ

ゴ、ウナギ、などの

淡水産のものと、コ

ノシロ、サツバ、ボ

ラ、ヌマガレイ、ス

ズキ、マハゼ、クロ

ダイ、シマイサギ、

チヌ、カガミダイ、

ウルメイワシ、ヌ

マガレイ、サヨリな

どの海産のものがあ

げられる。そのうち

コイ、キンブナ、コ

ノシロ、サツバ・ボ

ラ、スズキなどは魚

獲高の多い魚で特に

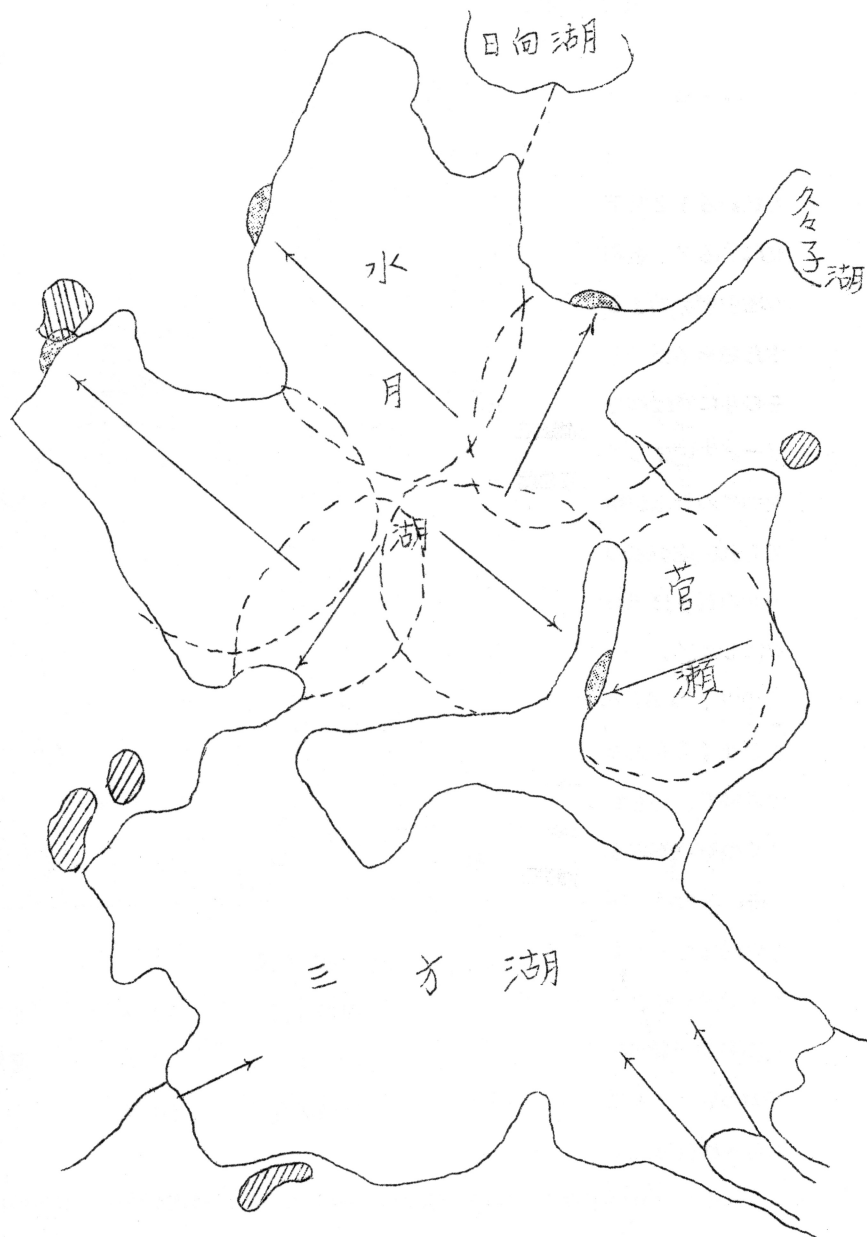


Fig. 3. 水月湖の地引網区域と三方湖のエリの位置(1966)

水産資源として重要である。

地引網

湖面を寒風が撫で始める12月下旬に入ると、名物の地引網が始まる。水月湖を6区分しその年に選ばれたリーダーによって地引網の計画が樹てられる。地引網の外網の長さは1500mにも及び、小舟20隻、作業員男女合せて30人程の多勢で、村をあけての賑いである。小舟に取付けられた外網はなるべく

大きく張られ、(1500m)網巾10mの網はうきに垂らされ張りめぐ

らされる。網巾は丁度10mの生物層に匹敵していて、網底が水深10mの湖底に達しているのと同じ道理である。岸近くにすえられた親舟の動力ウインチで外網は静かにせばめられるが、魚が揚げられるまで凡そ4日～5日はかかる。外網を急いで引くと危険を感じた魚は網を越えて飛び出すが、網底をくぐりぬけて逃げ出そうとする。網底をくぐった魚は硫化水素に侵され中毒死して浮上するが、悪臭で捨てるしかない。

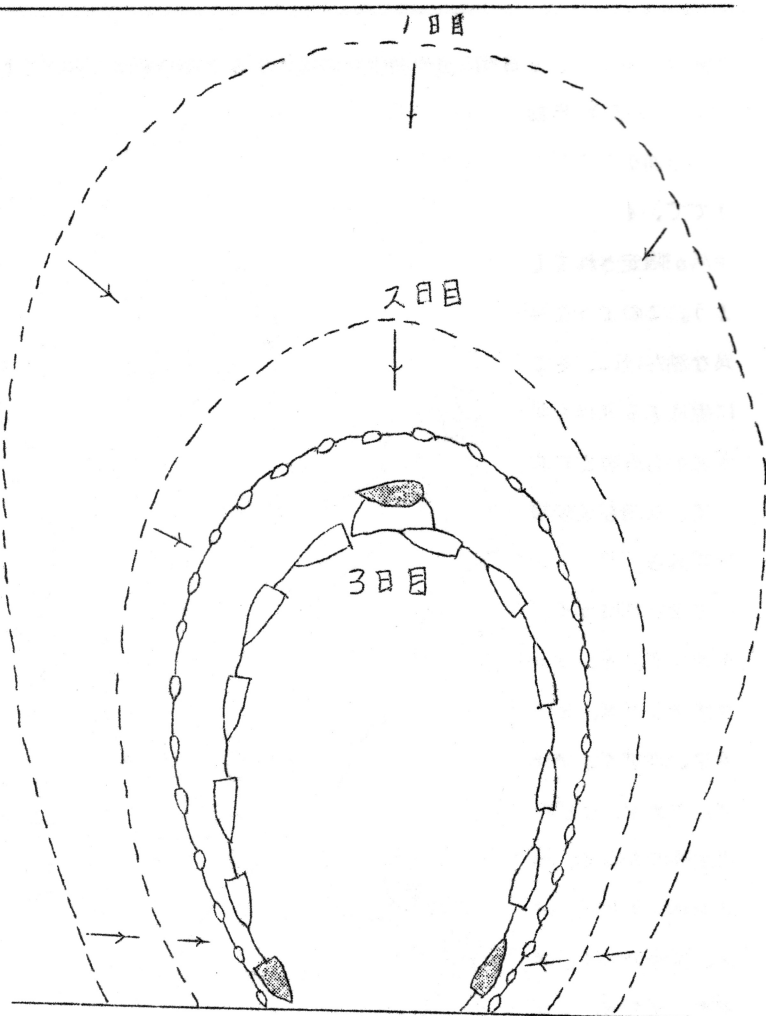


Fig. 4. 地引網模式図

網の全長	1500 m	舟	20隻
網巾	10 m	運搬舟	2隻
作業人員	30人		

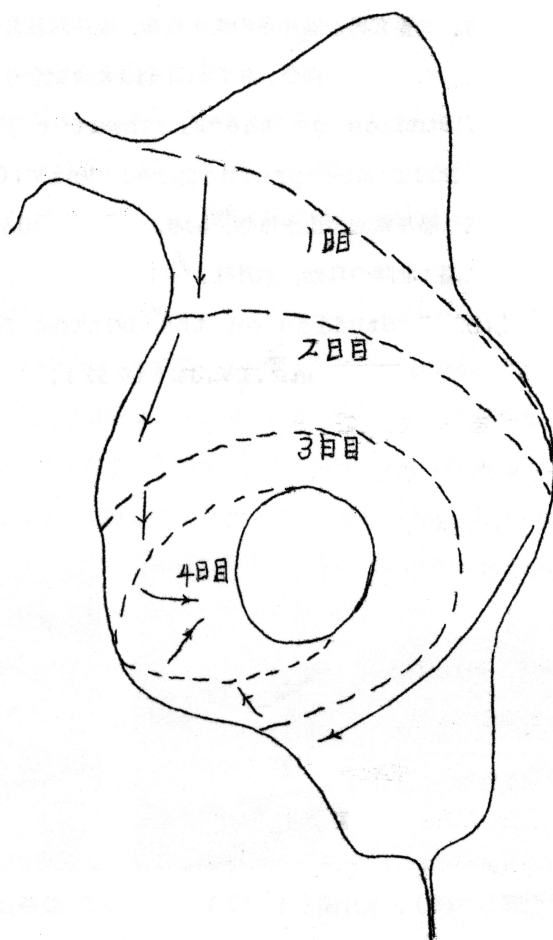
そのために、網はできるだけ時間をかけて引かれる。せばめられた網は魚を袋の中に追いつめるが、やがて3人掛りの大だもてすくい上げられ、用意された運搬船に投込まれる。

舟の中は見る見る中に魚で一杯になり、足の踏み場もない魚の山で驚いてしまう。余りにも壮観な作業の光景に緊張と興奮で、身を切るような寒さも忘れてしまう程である。時によると水揚げに半日も掛ることがある。次ぎ次に獲られてくる魚を見ていると、嵯峨水道や浦見川よりの区域ではサツバ、ボラ、コノシロなどが目立って多く、高塩性であることを示し、三方湖よりではキンブナ、コイ、ハスなどの淡水性のものが多く獲られることから、これらの魚の間に大きなすみ分けがあるのではない

かと思われて生態上大変興味深い。水月湖の大地引網は冬期間の12月下旬から2月下旬の約3ヶ月だけ行なわれるが、三方湖の年中漁業の行なわれているのとは比べて特異な魚法といえる。水月湖という他に類のない湖水から生れた大地引網の漁法も、他に類がなく、漁業資源とともに長く保存したいものである。

Fig.5. 菅湖における地引網

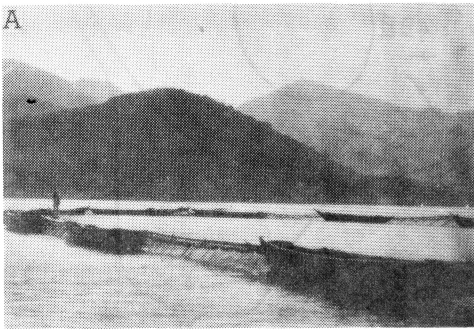
1966. 1. 9



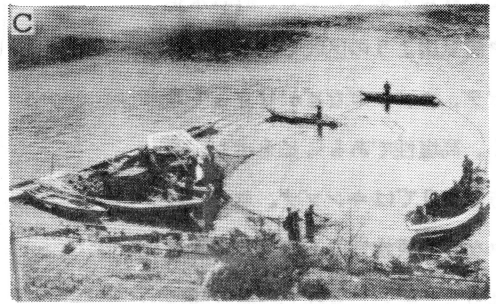
参 考 文 献

- 1) 五十嵐清、加藤文男：福井県の淡水魚類、福井県教育研究会理科部会、生物教育全国大会記念号(1966)
- 2) OKADA, Y: Studies on the Freshwater Fishes of Japan. Bull Mie-prefectural Univ, (1959~1960).
- 3) 加藤賢三：福井県地方淡水魚類、動雑、18, (1906).
- 4) 里見信生編：北陸の自然、六月社、(1966)
- 5) MIYADI, D: Studies on the bottom fauna of Japanese lakes. Zoolmag, IV, 1, (1932).

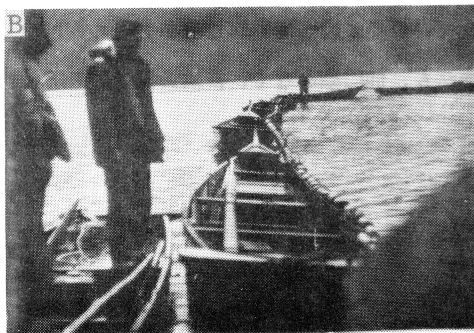
以上



A 地引網（外網）、水月湖（1967）



C 最終日の地引網（水月湖畔）1968



B 舟につなかれた外網、水月湖（1967）



D 網をしばり魚の水揚げの場所。1968